法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<新刊紹介>小笠原賢二著『黒衣の文学誌』

森島，稔

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
27
(開始ページ / Start Page)
88
(終了ページ / End Page)
88
(発行年 / Year)
1982-12-05
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019355

小笠原賢二著『黒衣の文学誌』

森島　稔

社会の状況的把握が極めて困難になってきている現代に於て、文学状況も同じように複雑、不明瞭で多岐に亘っている。その時々に「現時点である」という程の意味で現代という言葉を使えばいつの時代でも多少はそうであったであろうが、いよいよ私の生き始めた現代は時代というカテゴリーすらも持てなくなってきているように私には思える。一つの時代とは、徐々にできるだけ多くの人々が一定の方向性に沿って、ある何かに対して高揚感を抱き下火になっていく、その一つの起伏の時間的流れの幅だとすれば、現代はいつの頃からかこのサイクルが持てずに、ないしは大きくなりすぎたその歪曲線上を動いているのではないだろうか。特にメディアを例にとって考えた場合、一方的なマスといったものが圧迫され、多様なマイナー・メジャーとでもいったものが多数並立して流れているのが現代の状況だろう。その中で、ないかもしれないその先を占なうことはほとんど不可能に近いのかもしれない。ところが手がかりがあるという事をこの本がおしえてくれるのである。それはこの本のように作家一人ずつの過去から現在を、現時点での声であるインタビューをまじえながら丁寧に一本の線で結んでいく方法の集積であるのだ。グレアム・グリーンに『地図のない旅』という作品があるが、その冒頭に次のような一節がある。

「…破片の多くは断片的なものに見えるけれども、やがて時が来ればそれらこそ全体の中で無くてはならぬ大切な部分であることを示すにいたるだろう。…」

つまり、部分部分の立脚点を丁寧に探っていった本書は、そのいくつかの過去の点と現在の点を結ぶことで、その延長線上にある各々作家の可能性としての近未来を見ることができるし、それらを横に並べることで現在をより総体的に見ることができるのである。そして、本書に収載されている二十七人の現代作家のうち、三章の三人を除いた二十四人の作家をエンターテイメント系、シュルリアリズム系、私小説系の三系統に大別できると思う。このことは本書の最後にある吉本隆明へのインタビューと重なる部分があって興味深く思われる。

どうも話のあとさきが逆になったようで何とも座りが悪い気がするが、本書はあとがきにあるように「書評週刊紙『週刊読書人』」の編集兼記者である著者の一面を飾ったインタビュー記事を選択集成したものである。そして本書のもう一つの特色は、読む者がこの著者の文学を愛している嵩を思わず知らされてしまうような二十七人全作家への用意周倒な下調べと穏やかで優しい目つきの文章である。前述のように深い批評的視野を十分に持ちながらも、一章、二章では作家の名を題に持った短編小説を読んでいるような楽しい気分も味わえるのである。つまり本書は前述したように現在の文学の地層を見詰めながらその未来をも探っていくという面と、良質で読み易く楽しい現代作家あるいは現代文学と言ってもいいだろう、それの入門ガイドブックの面を合せ持っているのである。この二面が程よく調和され全体としておいしい一品料理に仕上がっているのが嬉しい本である。

（一九八二年八月　雁書館刊）